間違いＨＥＲＯ！！

ネッシー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
間違いＨＥＲＯ！！

【Ｎコード】
Ｎ８６４３Ｅ

【作者名】
ネッシー

【あらすじ】
昔からヒーローになりなかった！自由が出来る年齢になった今、俺はヒーローになる！（基本一話完結です。）

第一話：ヒーロー誕生！

俺の名前は森盛、読み方はモリモリだ、ちなみに本名である。

今は２０歳だが、この名前のせいで小さい頃は散々いじられた。

小学生の時はイジメられすぎて、

「俺、もう名前変えるっ！」と毎日叫んでいたものだ、

母にこの名前を付けた訳を聞くと、

「あら、だって面白いじゃない？」

実の親に殺意を抱いたのは、これが最初で最後だ…。

俺はココ流石町でヒーローをやっている。

誰に言われた訳では無い、俺がやりたいからやっている。

２０にもなって何やってんだと思うかもしれないが、住民の安全を守るためには俺が必要なのだ！

ちなみに大学には行っていない、というか中卒だ。

「お前阿呆だろ？」と思ったあなた！！

違うっ！俺はヒーローだ！

俺への依頼は公園のベンチの下にある『ヒーローＢＯＸ』に寄せられる、ハズだった…。

ピンクの箱にヒーローＢＯＸと黒いマジックで書いて置いておいた。

最初に見たときに木の枝や砂などがふんだんに入っており、何回か掃除したが、泥とか犬の糞っぽいのが入っていたときはさすがに諦めた。

今では公園のモニュメントになっている。

俺がヒーローだということは家族にもバラしていないが、１人だけ知っている奴がいる…、

俺の幼なじみであり親友の中谷トラだ。

カッコいい名前で結構な常識人だが、心が広くて、俺の事を暖かく見守ってくれる。

トラはめちゃくちゃ頭が良いので、ヒーローのなり方も知っている

と思って聞いたのがキッカケだ。

「ヒーローってどうやってなるんだ？」

「げほっ、げほっ……、なに…、言ってんだ？」

「真剣なんだっ！」

「い、いや、知らないけれども…」

「そっか…」

「ま、まぁ、知恵くらいだったら貸してやるから…」

「うんっ、ありがと！」

…と、そんなこんなで俺の相談相手になってくれている。

この依頼の問題も、トラに知恵をもらった

「ハァ、適当に箱置いたって分かるわけ無いだろ？」

「そうだなぁ、小さい子に『困ってる事を書いて、この木の割れ目に入れとくと、ヒーローが助けに来るんだよ』とか言っとけば口コミで広がるんじゃ無いか？」

毎日公園に来て、小さい子ども達にこの通りに言ってみると
数日後、依頼がはいっていた。トラには超感謝だ！
その依頼と言うのがこれだ！
『わたしの家のペロがしんじゃったの、生き返して！』
…
出来るかぁっ！！
…と、一瞬さじを投げそうになったが、記念すべき最初の依頼だからもう少し頑張ってみようかと思い、図書館へ出掛けた。
そうすると、『黒魔術～動物の生き返し方～』というスゴい本を見つけた、すぐに手にとって内容を確認する。
【動物を生き返すにはマンドラゴラの生き血と、ガーゴイルの羽が必要です。】
トラに電話をかけた…。

「マンドラゴラってどこに居るの？」

「……知るかっ！」

「じゃ、じゃあペロってどうやって生き返すの？」

「……無理だ。」

ということで残念ながら諦めた。

困っている人は居ないかと街を歩いていると、トラに会った。

～トラｓｉｄｅ～

町を歩いていると俺の幼なじみであるアホな友人に出会った。

「トラぁ～何か困ってない？」

こいつは二十歳にもなってヒーローになると言った、正真正銘のアホだ。

「別にないわ」

「え～」

「だって、だって、せっかくヒーローになったのに誰も助けて無い…。」

と泣きそうになりながら言われると、俺はかなり弱い。

「わかった、わかったから、誰か一緒に探そうな？」

「うんっ！」

と、結局は手伝ってしまう。

二人で歩いていると、電気屋さんと前にあるテレビが目に入った。

『今日午後1時、流石動物園から、一匹のライオンが逃げ出しました。流石町のみなさんは出来るだけ外へ出ないで下さい。』

「おい、モリモリ、ライオン逃げ出したってよ、危ないから帰ろ……」

俺は言葉を失った、モリモリがテレビを目をキラキラ輝かせながら見ていたから…。

「お、おい、それは止め
「すげぇっ！　見てみトラっ！ヒーローの出番だよっ！　流石町は俺が守るっ！！」

タタタ…

モリモリは走り去った。

…って言ってる場合じゃねぇっ！

と、いうことで大惨事になるまえにモリモリを連れ戻す事にした。

走り去ったモリモリを追いかけて行くと、もうライオンに出会っていた…。

「よくぞ来たな、この悪党め、この流石町のヒーロー…」

（やべぇ名前考えてなかった）

…

「…こ、この、モリモリマンがいる限り、お前の悪を許しはしないっ！」

モリモリの考えが手にとるように分かるのは俺だけだろうか？

「ど、どうだ参ったかっ！」

ライオンの方は何だコイツみたいな感じでモリモリを一目見て、プイっと完全に無視した。

「コ、コラッ、無視すんな！」

と言ってそこら辺に落ちていた石を投げようとした。

これはマズいと思い止めに入ろうとしたが、モリモリがいるのはライオンの目の前、足がすくんで動けない。

チクショウ動けよっ！と足にカツを入れようとしたとき、

パンッ　パンッ

…と、銃声が鳴り響いた。

ライオンが倒れている。

良かったと安心して、その場にへたり込んだ。

ふと、モリモリを見ると…

「ライオンさん死んじゃったの？　嫌だよ、死んじゃ嫌だっ！」

と、ライオンにすがりついて泣いている。

「お前が殺したのかっ！」

と言って銃を持っているおじさんに怒り出した。

おじさんは、

「麻酔を打っただけだから大丈夫だよ」と優しく説明しているが、

「マスイってあの幻覚とか見えてくる奴だろ！　そんなもの打ったのか！」

となおも怒っている。心の中でそれは麻薬だろ、とつっこんだが、聞こえるはずも無い。

ヒーローになるとか言っているアホにまだまだ振り回されるんだろうなと思いながら、困っているおじさんを助けるために重い腰を上げた。

第二話：ユニフォーム！

この前のライオンとの死闘は凄かったな、周りに人は居なかったから、まだ有名になって無いけど…。

町を救ったって事には変わり無いからヒーローだよな？

みんなの為に頑張ったんだもん

『あの感動をもう一度』なんちって（笑）

まぁそれは置いといて、ヒーローに大切なものをすっかり忘れてたんだ。

それはユニフォームである！

…

ば、バカにすんなよ、ヒーローって言ったらユニフォームだろ？

○○レンジャーだって生身で戦ってる奴なんか居ないだろ？

ほら～、やっぱ大切じゃん、俺だってカッコいいユニフォームが欲しい！

あっ待てよ！話聞いてけよ！

＊

俺はトラにユニフォームの大切さについて説いていたら、トラはどっかへ行ってしまった。

もっと話していたかったのに…。

ということでユニフォームを作ろうと思う。

俺にはヒーロー資金として中学を卒業してから貯めたお金があるので、それに手をつけて行こうと決めた。

ヒーローの服が売ってるところなんて見たこと無いから、布から作っていくことにする。

…

布を買って来てノリノリで作っていくが、全然上手くいかない…。

仕方ないから仮面だけ作る事にした。

二つの赤い布をガムテープで端だけ貼り付け、被ってから目と鼻と口のところだけハサミで切り取った。

早速、鏡で確認してみるが、そんなにカッコ良く無いけど、顔はちゃんと隠れてる。

でもまぁ仕方ないかと思い、これで妥協した。

そうして、これを被って、商店街へ出掛けた。

…

外へ出掛けて見ると色んな人から好奇な目で見られた。
ひそひそ話をしていたり、子供の目を隠している親もいる。

そんなに目立つかなぁとか思いながら歩いていると、目の前に友達と歩いているトラを見つけた！

～トラｓｉｄｅ～

モリモリがユニフォームを着たいなんて、またアホな事を言い出したが、まぁ俺に頼ってくるか、諦めるかどっちかだろう、と思っていて

今はバド仲間の友達と二人で打ちに行こうと商店街を歩いていた。

俺はモリモリを甘く見ていた…。

「トラーっ！！」

となんか赤い変な布を被っている人物が俺を呼んでいる。隣の友達が声をした方を見て、その後、俺に視線を移した。

「おぃ…トラ、お前…」

「ひ、人違いだろ！」

「で、でもトラって名前そうそう…」

「ち、ちげぇよあんな知り合い居るわけねぇだろ！
あ、俺用事思い出したわ、先行っててくんない？　っていうか行けっ！　行かないと殺すっ！」

俺は隣の友達を先に行かせ、俺の名前を大声で呼びながら目の前まで来た幼なじみに目を向けた。

「トラ？さっきの友達じゃ無いの？良いの？」

「別に気にすんな、それよりその頭はどうしたっ！？」

「えへっ、もしかしてカッコいい？」

「はぁ…」

ふと、周りを見渡してみると、オバサンと警官っぽい人がこっちを指差しながら話している。

「お前ちょっと来い！」

…と、人の目から死角になるところへ連れ込んだ。

「悪い事は言わねぇ、その被っているものを二度とつけるな！」

「えぇー、なんで？」

「どこからどう見ても、今から銀行襲いに行くようにしか見えないからだ」

「そうかぁ…一生懸命作ったのになぁ…」

モリモリの落ち込んでいる顔に罪悪感が芽生えるが、さすがにこれを被っていたら、警察に捕まってしまうので、止めさせる。

「別に顔隠さなくても良いだろ？　ほ、ほら、弱いものを助けるヒーローなんだろ？　顔見えなかったら怖がっちゃうかもよ。」

…と良く分かんない理屈で押し込めようとする。

「うん…分かった…」

返事に元気が無い、これはツラい…

「だ、だからさ、じゃ、じゃあ、あそこのたいやき買ってやるから元気だせ！　それに、お前、そのままでもヒーローっぽいよ！　お、やべぇヒーローじゃん！」

すると…

「えっマジで？ヒーローに見える？　参ったな、仮面なんかいらないな、ヨッシャ！たいやき5個な！」

と、機嫌が良くなって安心した。

モリモリの手作りの仮面をしまわせて、たいやきを5個買って持たせて…

「ありがとー！トラ大好き！」

「あーハイハイ、じゃあな！」

みたいな感じで別れた。

そうして先で行って待っているはずも無く一部始終を見ていただろう、友人の事を考えて、あいつの事をどうやって話そうか考えながら歩きだした…。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8643e/

間違いＨＥＲＯ！！

2010年10月9日03時21分発行